

# 宗方小太郎日記補足、明治 27 年 6 月 30 日～12 月

大里 浩秋

## 1. はじめに

本所報 No. 37 に宗方小太郎の明治 21 年の日記（但し中国滞在時期のもののみ）を載せ、No. 40 に 22～25 年、No. 41 に 26～29 年（但し、27 年 6 月 27 日から 12 月末までと、28 年 3 月 23 日から 8 月末までを除く）、No. 44 に 30～31 年、No. 46 に 32～33 年、No. 47 に 34～35 年、No. 48 に 36～38 年、No. 49 に 39～40 年、No. 50 に 41～42 年、No. 52 に 43～44 年（但し 43 年の欧米旅行時期を除く）、No. 54 に 45～大正 2 年、No. 55 に 3～4 年、No. 56 に 5～6 年、No. 57 に 7～8 年、No. 58 に 9～10 年、No. 59 に 11～12 年（但し 12 年は、宗方が亡くなる 18 日前の 1 月 15 日まで）の日記を載せた。

上記のように、いくつかの時期の日記を載せなかったのは、その多くは私の判断で割愛したのであるが、No. 41 に載せたいと思っていた明治 27 年 6 月 27 日から同年中の日記については、宗方関連の資料を保存している上海社会科学院歴史研究所の書庫には見当たらず、職員に聞いても返答がないので、その部分の掲載をあきらめた経緯があった。しかし、その時期の日記が存在することは、1993 年刊の中国近代史資料叢刊続編『中日戦争』第六冊に一部ではあるが訳載されていることで確認できたので、いずれ機会があれば見せてもらえるだろうと思いつつ、今に至った。ただ、書庫の宗方関連資料が置いてあるところにちょうどその時期の宗方日記を書き写したと思える 2 篇の鉛筆手書きの文章があり、宗方本人の日記が見当たらないからにはその代わりにと思ってコピーを取らせてもらった。そして、この 2 篇（仮に A と B とする）を見比べると、その大部分は同じ文になっているものの、A が拾っていて B が拾っていない文があるかと思うと、A が拾っていない B が拾っている文があり、A と B それぞれが拾っているところを補い合うことで、宗方本人が書いた日記の完全な再現とまではいかないまでも、かなりの程度に再現できると判断した。そこで今回は、そのかなりの程度に再現できたと判断する文を紹介することで、一部日時が欠けているが、明治 27 年 6 月 30 日から 12 月までの宗方の動きを追うこととする。

この時期の宗方日記を省略を交えて書き写した文が何ゆえに 2 篇あるかは不明であるが、昭和 10 年代に弟子の波多博が宗方の伝記を編集すべく、宗方を回想する各界人士の文や新聞に載った宗方に関する記事を集めたりした際に、宗方の活動が日本中に最も注目された日清戦争期の本人の日記も抜粋して載せるべきだとして用意されたものであるのはおそらく間違いないことだと思われる。

なお、前回までと同じであるが、お断りすべきことを記す。原文のカタカナはひらがなに改め、漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を加えたが、日本人の名前の漢字はそのままにした。私が付す解題中での原文の扱いも同様である。

## 2. 明治 27 年 6 月 30 日から 12 月までの日記

先にお断りしなければならないことがある。本誌 No.41 に明治 27 年の宗方日記を載せた際には、6 月 27 日以降の日記は載せられなかったので、その期間の宗方については、上記『中日戦争』に訳載された彼の日記や『対支回顧録』下巻の列伝「宗方小太郎」（原本は昭和 11 年刊、再刊本は明治百年史叢書の一冊として昭和 43 年刊、原書房）などを参照しながら、おおよその動きを書いたのであるが、それは今回宗方の原文とみなした内容に照らしてもほぼ一致していることが確認できたので、以下、本誌 No.41 に書いたことに若干の訂正と補足を加えて今回の日記の解題に代える。

宗方は、明治 27 年 2 月半ばから漢口に滞在しているが、6 月 26 日に上海の海軍関係者からの電報で、「至急漢口を発し芝罘に至り井上氏に会せよ」との命を受けて（26 日の日記）、日清戦争勃発直前の清国軍の動きを偵察する使命を帯びて山東省芝罘へと出発するのである。そして、漢口から上海を経て 7 月 6 日に芝罘に到着、「威海衛軍港に密航し敵情を探知せんと欲し」中国人を 1 人随行させようとしたが、危険を察して従うものがいなかったので、「独行に決し文服を脱して野服に改」め（7 日の日記）、すなわち一般中国人の格好をして、「病を免て」8 日に徒步で領事館を出発（8 日の日記）、10 日に威海衛に達し湾内様子を視察、11 日にかけて軍艦多数が碇泊する状況を確認して芝罘に戻った。19 日には、威海に派遣していた偵察員の情報で、鎮遠以下 14 隻の軍艦がまもなく朝鮮に向かうことが分かり、宗方自身 22 日に再度威海に行って湾内の軍艦や砲台の様子を偵察し、さらに 27 日に船で天津に向かい翌 28 日に天津に着くと、神尾少佐、堤大尉、石川伍一（宗方とは、漢口樂善堂で一緒に活動する以前から親交があり、26,7 年の頃は天津日本領事館で海軍の諜報活動に従事していた）と当地で引き続き情報収集する任務を石川と宗方のいずれが担うかについて協議し、それを強く望んだ石川が天津に残ることになり、宗方は 31 日に芝罘に戻った。その後 8 月 21 日には石川が逮捕されていることを知りさらに遅れて処刑されたことを知って、天津で顔を知られている石川を残したのは間違いで自分が残るべきだったと悔やむことになった。

日清戦争勃発後に芝罘に留まる日本人は宗方 1 人となったが、引き続き威海衛や旅順に人を派遣して情報を得ては上海東文三（黒井大尉）あてに報告した。次々に送った報告中の十二号と十四号が清国政府に没収されることになり、ますます宗方の身に危険が迫ったことから、東京からの指令で急ぎ上海に引き上げることになった。8 月 29 日芝罘から上海行の船に乗ったが、領事館を出る時にすでに中国側に知られてしまい、「予事の破れたるを知るも進退両難寧ろ進んで破るるに如かずと決心し」て上船した。上海に着くまでの 2 昼夜間に前後 6 人の顔見知りの中国人が載っていて、「愈一死を決し、命を天に任したり」（29 日の日記）。その 6 人中最も難関と思えた南京長江水師の把総蔡には、その部屋に訪ねて行って私が日本人であることを誰にも言わないでくれと頼んで承知させ、あの 5 人は同室にいながら「予の顔を看破せず。実に天佑有る者に似たり」という状況であった（30 日の日記）。さらに上海に入る手前の呉淞口で中国軍艦に進入停止命令を出され、中国人官吏と西洋人が甲板に上がり「ムナカタ」という日本人がいないかと尋ねたが、船主は日本人は乗っていないと答えたので去っていったという。こうした連続的な危機から免れて 31 日に上海に上陸し、9 月 7 日には洋装に換えてイギリス船に乗り、「呉淞を過ぐる時官府の物色するを恐れ頗る警戒」した（8 日の日記）が、何事もなく通過して 11 日に長崎に着いた。その後、至急広島大本營に赴くべしとの軍令部の電報があつて、16 日に広島に着くと、「破格を以て特に謁見を賜ふの内命」があり、その際は「清国滞在中の支那服を着すべし」とのこと（16 日の日記）で、急遽熊本の緒方に依頼して間に合わせの服を送らせることになった。10 月 4 日大本營で「天皇陛下に拝謁」し、さらに「清国の形勢に就て下問さる。予一々縷陳二時間の久しき

に及ん」だ。天皇に代わって宮内庁の幹部が説明を聞いたのである。その後、翌年3月9日に自らも台湾出兵に参加するまでは広島に滞在して大本営に出勤し、未だ続いている戦争への備えの仕事に従事し、従軍する通訳の人選に預かり、出征者への激励に加わり、会いに来た知り合いと交流して忙しく過ごしている様子が日記からも窺うことができる。そしてこの時期の、敵陣を間近にして情報の収集に努め、間一髪で敵の追及を逃れ、破格を以て明治天皇の拝謁に預かったことが宗方の英雄伝となり、亡くなつた後の日中戦争の時期にまで語り継がれることになるのである。

六月三十日 雨天。午後一時上海に達し、招商局碼頭より登岸し虹口津川氏の寓に到る。中食後出て田鍋を訪ひ、転じて山内に抵る。速水等在焉。速水より東氏の住所を尋ね、往て訪ぶ、在り、晚東和洋行に会することを約して帰る。六時東和の約に赴く。東、速水と飲む。九時風雨を衝て上車帰寓衣履皆沾ふ。田鍋、山内、山座諸氏在り。田鍋氏宿す。

七月一日 日曜日 晴。朝山内嵒を訪ひ朝食を吃し、去て田鍋を敲き、十一時領事館に至り東氏に会し照量する所あり。二時帰る。楠内、藤崎、岩元、勝木、岩崎、池畠、川村、猪田等前後來訪。晚田鍋日新洋行に至り飲む。相携へて帰る。福原と角田、楠内等の寓に至り中島真雄を訪ぶ。去りて勝木を敲き帰る。白岩龍平在り。井手三郎熊本よりの信到る。

七月二日 半晴。午前東氏來訪。出て城外に至り衣服皮箱を購ひ帰る。田鍋來訪。下午行李を收拾す。島崎氏へ報告を作り之を發す。小山平、藤崎、白岩等來り別を告ぐ。山座、田鍋両氏亦來訪。十時半通州輪船に上る。船究て雜踏余地無きを以て招商局の豊順輪船に換坐す。一室を占む。煙台に至る九円五十銭なり。曹及び福原林平來送。

七月三日 晴。詰朝開船、碧波漂渺見るべき者なし。

七月四日 晴。黒水洋を過ぐ。風波静穏。

七月五日 晴。九時船煙台に達す。直に領事館に投す。横田三郎、伊集院領事及井上少佐に面す。青木熊五郎、鐘崎三郎亦來訪。館内横田氏に宿す。

七月六日 晴。日清両国の危機愈逼り決裂旦夕に在り。上海田鍋、津川、桂、中島真雄等々に概略を通報す。外東京佐々友房氏に日清関係の大略を報告す。下午東京海軍省角田秀松氏より島崎氏転任の事を報告し来る。直に返書を作り投郵す。

七月七日 下午大雨。午前青木、鐘崎來訪、十一時青木の寓広東街高橋に至り鐘崎等と三人会食す。二時青木生天津に向って發つ。予明日を以て將に威海衛軍港に密行し敵情を探知せんと欲す。一清人を隨へんとす。皆此の行を危んで応ずるものなし。予直に獨行を決す。夜文服を脱し野服に改む。蕭然たる野人なり。五時玄海丸來着、日本新聞社通信員北村、大坂毎日高木利太、天野恭太郎等來着。夜惡寒頭痛起座すべからず。鐘崎亦た明日の玄海より天津に渡る。

七月八日 陰晴無常。詰朝結束領事館を發し病を勉て程に上り、南威海軍港に至り万危を冒して敵軍の動静を窺んとす。行く三十里降雨至り衣履尽く沾ふ。三時寧海州を過ぎ行く五里、景村に宿す。人家十余戸。惡寒煩惱。

七月九日 晴。二十五里上庄を経、酒館を過ぎ、芦島口村に宿す。雷雨大に至り全身悉く沾ふ。

七月十日 晴。四十二里威海衛に達し、西門内の一小店に投宿す。湾内軍艦十艘、水雷船三隻、汽船一隻。夜城樓に上り湾内の形況及燈台の点火を望む。

七月十一日 晴。詰朝東門に上り湾内を視察す。劉公島前に當り湾南北四十里と曰ふ。軍艦十三隻碇泊す。小午結束威海を發し、夜酒館に宿す。疲労殊に甚し。

七月十二日 晴。酒館を發し上庄に打尖。下午寧海州を過ぎ。大雨、晴を待て發す。又行く十里、雷雨大に至る。進んで一川を徒渉す。深き頸に及で流れ頗る急なり。夜唐家坡に宿す。寧海を隔る十五里。此日貧人と同行す。夜之に寝食を分ち且之に百銭を給す。

七月十三日 晴。下午芝罘に達し、領事館に投す。此行病を勉めて道に上り、炎風烈日沐雨櫛風具に辛苦を嘗め、疲労特に甚し。

七月十四日 晴。終日在館。

七月十五日 晴。午前致遠号輪船に至り、疲労特に甚し。

七月十六日 晴。午前致遠輪船に至り搭載の兵器を見る。田鍋安之助、家大人の信到る。光彦の不品行を報ぜらる。直に復書且つ光彦を詰責す。外に田鍋、津川、桂諸氏及東京佐々友房氏へ発信、北地方の動静を報す。

七月十七日 晴。李鴻章新たに淮勇士營を募るの電報あり。又宋慶旅順の毅字軍四營を率ひて朝鮮に向ふとの報あり。

七月十九日 晴。午前牧相愛北京天津より来着、通州輪船にて上海に帰る。津川三郎への信を托す。是日威海に派遣せし偵察員帰来。該港碇泊の鎮遠、經遠、靖遠、濟遠、廣甲、廣乙、廣丙、來遠、鎮東、西、南、北、中、辺、超勇、揚威等の諸船戦備を為し、本日若くは明日相率て朝鮮に赴くと云ふ。魚雷二隻之に従ふ。外に定遠は修理の為め魚雷一隻を携へて旅順に赴けり。昨日帰威の予定なり。去る十六日上海より兵器を搭載して来煙せし致遠輪船及康濟は、糧食を満載し既に朝鮮に向け出發せり。

七月二十日 晴。去る十八日旅順の馬隊五營陸路朝鮮に向て出發せりと云ふ。

七月二十一日 陰天。是日より威海に再遊し北洋艦隊の動静を偵察せんとす。天候の不可なるを以て明日に延期す。上海田鍋、津川、桂三氏に致書し北京の動静を報す。外に家大人に金二十弐円を送る。田鍋氏に托し上海より匯寄す。明日威海行の準備を為す。

七月廿二日 晴天。詰朝領事館を発し威海に向ふ。八十五里孟良口老廟の永順客店に宿す。此地は威海、芝罘の中間上庄の東五里に在り威海本道第一の地点にして、人家二戸山頸に在り、夜静かにして四山寂寥旅魂飛んで天の一涯に至る。

七月廿三日 晴。威海を距十五里の一小店に投宿す。人家一戸有るのみ。

七月廿四日 早朝威海に着し港内の軍艦を査点、西砲台を偵察し、百尺崖地方を踏査し、直に帰途に就き四十二里芦島口に帰り宿す（軍艦十二隻有り）。

七月廿五日 晴。老元山の小店に宿す。臭虫、蟻、白蛉、蚊の攻撃に逢ひ終宵一睡せず。

七月廿六日 雨天。道路泥濘衣帽悉く沾ふ。六十七里芝罘に帰る。上海山内、朝鮮山崎、上海田鍋の信到る。（此日本地道台より愈開戦せしを以て居留民保護の通告を為し来る。）

威海城周廻二千米突、人煙三四百、市街は四門に通ずる大街のみ。寧海州周廻千四百米突四門を穿つ。人煙六七百。去る廿四日日本、朝鮮に在るの兵京城の北幹山を占領せし為め韓兵と小鬪あり。又た此の日日本軍艦四隻北洋の平遠号を逐ふ途中、天津より朝鮮に派遣する盛軍六營と兵餉糧食を満載せる高陞、図南、致遠、操江の四隻に逢ひ、致遠を擊沈し高陞、図南を傷け、操江（此のみ兵艦にして、兵餉糧食を積み、三隻の運送船を護送せしもの）を捕拿したり。高陞、図南は直に威海に遁走せりと云ふ。復た聞く、致遠は濟遠の誤り、濟遠は傷を受けて逃れたりと。

七月廿七日 晴天。上海田鍋、山内二氏への返信を発す。此日午前七時武昌号に搭じ天津に向ふ。

七月廿八日 晴。黎明太沽口に達す。船貨を別船に卸し、白河に進み塘沽に達す。舢舨に乘じ停車場に至る（舢舨賃六十錢）。一時三十分汽車頭等室に乘じ天津に向ふ。軍糧城停車場を過ぎ二時間にして達す。松昌洋行に至り石川伍一、堤、山田、林（堤は瀧川海軍大尉、山田、林は陸軍なり）等に会す。夜堤、石川二氏とともに神尾陸軍少佐を訪ひ商量する所あり（夜石川、鐘崎と寃談、一時半就寝）。夜石川伍一と三井に至り吳永壽を訪ふ（是日恰も盛軍の残余海定号より出口の時なり）。

七月廿九日 雨。午前三井より銀五百弗を送り来る。二時半諸氏に辞別し停車場に至る。汽車発着時間今日より改正、五時三十分に非んば開車せずと云ふ。上等に上り待つ。五時半開車、雷雨甚だ猛。八

時過ぎ塘沽に達す。風雨を衝て春泰客棧に投ず。汽車賃二等二十七錢、頭等は倍増なり。船賃煙より津込下等三円七十錢なり。

七月三十日 雨。朝客店を發し北直隸号に投ず。下午二時開船。腹痛甚し、吐瀉二回漸く愈ゆ。終に晚餐を用ひず。

七月三十一日 晴。午前八時煙台に達す。直に上岸領事館に投ず。上海桂齊一、田鍋、柳原、藤城、熊本守田原、前田彪諸氏の信に接す。煙台天津間は大略二十時間にして達す。先日噂ありし朝鮮近海にて我軍艦のために沈められし致遠は軍艦濟遠の誤にて、艦長傷を負ひ副長死し大破損を蒙り威海に逃れたり。高陞は沈められ、広乙（軍艦、或は牙山に逃れたりと云ふ）も擊沈せられ、操江は捕となれり。又聞く牙山の清兵既に我兵と交戦迭に死傷あり。朝鮮王城は焼却され王は我軍中に留まれりと。本日天津より伴ひし樸十を威海に派遣す。天津の盛軍十二營を三道より進むるの報あり。即ち大東溝より上陸せる者一は牛庄と辺門なり。營口の一營、奉天の五營、鳳凰城の二營も既に出發せりと云ふ。本日胡五の上海行に托し津川、桂、田鍋三氏に發信す（第四）。吉林の鎮辺二營、鎮遠二營も出發せり。

八月初一日 晴。佐々友房氏に發信（第三）。家大人に發信。是日川畠某滿洲を経て此地に来る。鹿児島人、嚮きに陸軍少尉の職を辞し支那に渡り西安府に滞留し、頃者北京に出てたる者なり。夜更け（大抵十二時と覚ゆ）外務省より電報到る。去月卅一日既に各国に向て宣戰を公布せりと云ふ。是夜腹痛甚し。

八月二日 晴。

八月三日 晴。

八月四日 晴。午前天津領事及居留民一同該地を引上げ帰朝。重慶号より此地に来る神尾少佐、林中尉、木下、呉等上岸領事館に来る。太沽碇泊中支那兵銃剣を装し汽船中に乱入し日本婦人數名及領事の兒子を拘引し、兵營中に至り具に凌辱を極め制縛撲打至らざる所なし。加之邦人の携帶品及銀錢を劫奪し去る者数百金に上れりと云ふ。

堤大尉より井上少佐に来る秘信も亦搶奪する所と為る。午後五時米國代理領事來りて我領事館を封印す。蓋し其の保護に属すればなり。於是伊集院領事、横田書記生、高垣徳治三氏及本地男女居留民一同芝罘を引上げ重慶号に搭じて帰朝す。帝國にして此地に留まる者只だ予一人のみ。上海田鍋に致書留煙の事を報ず。午前井上少佐と交代を終へ事務の引継を為す。井上も領事一同と本日帰朝の途に上れり。偵察費として銀五百六十七弗を受取る。追憶す、昨年此日予東都を辭して帰熊の途に上る。萍跡西東遷移無定、而時勢之変転亦如斯、不知明年此日時勢与境遇驅我置何地也。

八月五日 健晴。終日在館。午後七時軍艦鎮辺入港、威海より糧食買入れの為来る者。直に人を派し威海の動静を探聞せしむ。威海より威成山角辺の電線架設を終へ、山東布政使六營の兵を帶して該地に駐防すと云ふ。本港付近の地に於て新たに兵勇二百余人在を招募し、旅順に至り提督宋慶の節制に帰す。

八月六日 晴。午前七時通州輪船天津より入港、我小村公使の一行に乘じ帰朝す。予一書を書記官中島雄に致し、桃一箇を贈る。上海東文三氏への報告二通を作り北洋の動静を報ず。中島氏に托送す（十一号）。中島氏の返信及天津堤大尉の書到る。石川、鐘崎天津を逃れて内地に潜入せりと云ふ。予書を作り堤氏に致す。又堤氏の返書あり電報到る。直ちに之を堤氏に寄す。又返書あり、石川、鐘崎遁走の顛末を報じ来る。通州輪船四時半開船。去る二月天津居留民引上げの時大沽に於て支那兵乱暴の際堤氏より井上氏に寄する軍事上の秘密書兵卒の掠奪する所と為りてより、天津残留の邦人に対する官府の注意甚た嚴にして形勢穩やかならず。若し堤、山田列にして今より両三日天津起程を緩ふせば、如何なる奇禍に罹りしやも計られずと云ふ。予既に身を以て軍國に許す心中予め三策を画す。事に臨んで驚かざるが為なり。即ち機密書類を整頓し衣履を整へ不虞の備を為し、一面には新衣を準備し一旦彼の捕ふる所と為れば盛装して官府に赴き從容として弁する所あらんとす。萬一事理を以て争

ふべからずんば、六尺の形骸を得て一笑虎狼に付し、泰然命に安んじ彼等に示すに神州男子の標本を以てせんとす。平生の学問此時に於て始めて真光を放たん。晚招商局及道台衙門の官吏來り探査する者の如し。

八月七日 雨。是日より高児を威海に派遣し動静を伺はしむ。是日天津より舢舨來り二カ月分の給料を要求す。予井上氏の囁に従ひ舢舨を売却して適宜処分せしむ。

八月八日 晴天。是日より樸十を旅順に派遣し情況を探聞せしむ。下午二時嚮きに旅順に派遣せし遲姓（清暦六月十七日發）二十一日を経て帰来、船便なかりし為め延引せりと云ふ。

八月九日 晴。

八月十日 晴天。武昌輪船入口、下午三時上海に開往。東文三氏に送書し威海、旅順の形勢を報ず。此書は四馬路三山公所に寄せ、白岩より転致せしむ（十二号）。下午三時高姓威海より帰る。刻下該港碇泊の兵艦は、鎮遠、定遠、經遠、靖遠、來遠、致遠、平遠、超勇、威遠、廣丙、廣甲、康濟、湄雲、鎮東、中、北、辺の十七隻なり。外に魚雷四個あり（昨九日下午三時見たる者）。暮時烟台市中喧伝す、我艦隊威海を窺ひ数砲を放て去ると。人心頗る洶々たり。

八月十一日 晴天。午前便船あり、上海東氏に威海の報告を送る。田鍋氏に托して東に転致せしむ（十三号）。帝国軍艦昨日威海を砲撃せるは実説なり。烟台の豪富此日より家財を搬運して山後に避くる者多し。英國軍艦三隻本日五時入港、目下此地へ繫泊せる者合わせて五隻あり。是日威海碇泊の艦隊悉く出口し、鎮西、鎮北、鎮中、鎮辺の四隻を残せるのみとの説あり。威海より来る送信者の報する所なり。

八月十二日 晴。

八月十三日 晴。孫金彪二營の兵を派し、烟台、威海間の要地に駐紮せしむ。袁世凱一万五千の兵を率ひて天津を發し、陸路朝鮮に向つたりとの説あり。

八月十四日 晴天。去る十日鎮、定、經、來、致、靖、平、廣甲、廣丙、濟遠（十日下午修理を終へ旅順より帰る）、揚威等の十一艦、魚雷二個を帶び威海を發し朝鮮近海に向ひ、敵艦見当たらずとて十三日威海に帰れりと云ふ。十四日（本日）鎮遠、定遠、經遠、來遠、致遠、靖遠、廣甲、廣丙の八艦、威海を出で、旅順、大沽等の地に巡航す。

八月十五日 晴。（托事略す）

八月十六日 雨天。烟台に於て更に一營の兵を調し大連に送る筈なり（今二百集る）。英國軍艦大砲十二門、魚雷四個を過日旅順にて陸揚げし支那政府に贈れりとの説盛なり。或は真ならん乎。天津より米を積み烟台に来る民船渤海にて日本軍船の押留する所となり、米穀は悉く取上げられし由にて、船主本日当地の税關に來り告訴せり。

八月十七日 晴。支那信局に托し（田鍋氏転交にて）上海東文三氏に報告を送る（十五号）。過日烟台より二營を率ひて威海地方に赴きし孫金彪、昨日帰煙四百人を帶て回る。余の六百人は威海に到る。沿道の要地に配布せりと云ふ。旅順駐防の豫軍八營去る十四日陸路朝鮮に向て出發せりと云ふ。

八月十八日 晴。

八月十九日 晴。廣乙号遁難兵本月十四日威海を發し此地に来る者の説に、刻下威海には超勇と魚雷三隻有るのみ、別船は都て大沽、山海關一帯に赴き陸兵を積で沙河子に送ると云ふ。丁汝昌も目下天津に在り。外に鎮北、中、辺、東の四小船も威海に在り（十八日午前過ぎ）。上海東の返書到る。予が十二号報告は届かずと云ふ。

八月廿一〔廿〕日 晴天。是日午前東氏に報告を送る（十六号）。

八月廿一日 晴。石川伍一天津潜伏中終に官府の捕ふる所となる。仮令へ豚奴の毒牙に斃ると雖も、亦一世の快男児たるを失はず。肉食苟安の惰夫をして愧死せしむるに足るなり。予は其從容死に就き奴輩に示すに神州男児の真面目を以てせんことを望むなり、噫。下午五時高姓を天津に派遣し、窃かに

石川の現状を窺ひ兼て津沽の動静を探らしむ。

八月廿二日 晴。無事。

八月廿三日 晴。

八月廿四日 晴。

八月廿五日 晴。市外各地を巡視す。英國軍艦五隻、魯艦一隻碇泊。

八月廿六日 下午上海伊東氏より特使来る。東京本部より電報にて至急余を上海に呼ぶ。予が第十二号秘信、十五号信支那官府の手に落ちたるが故なり。直に結束す。天津への急使帰らざるを以て休む。通州輪船上海に行く。

八月廿七日、廿八日 善後策を画し張四に托す。

八月廿九日 晴。六時連陞（怡和洋行）、桂林（太古）二隻天津より入港、要用の書籍数部を除く外は領事館に留置し、下午二時上海の特使某と與に上船、領事館を出る時既に支那人の知る所と為る。予事の破れたるを知るも、進退両難寧ろ進んで敗るるに如かずと決心し断然連陞号に上る。船面に至る。旧と識る所湖南の挙人某々等二人と其の僕二人を認む。知らざる〔と〕為して下層の下等室に至り之を避く。席既に定まるや予が前面の室に南京長江水師提標親軍中營把總（長江水師）蔡廷標有り、這也知人なり。予上下前後敵中に陥り如何ともするなし。船を去て陸に上らんか既に土人の看破する所となる。上海に至る二昼夜間前後六人の知人あり、万々予を認出せざるの理なし。是に於て愈一死を決し命を天に任せたり。意謂らく、天若し区々の微衷を諒せば我必ず擒とならず、若し捕に就く、此れ天の我を捨つるなり。只だ蔡姓の室予の眼前に在り、避けんと欲するも避くるに地なし。先づ發して之を制するにあらざれば到底全き能はざるを知り、自ら行て其の室を叩き蔡姓を見る。蔡驚きて言無し。予徐に曰く、両国既に開戦すと。彼冷然として曰く、果して此事有る乎、我未だ之を聽かずと。隠に余に絶つの意を示す。余曰く、吾は儒生なり、幸いにして國に官守なし、旧に依て山水の間に放浪するを得、今將に暫く滬上に帰りて紛擾を避けんとす。彼曰く、嗟々危し、足下の死生實に此の船中に在り、足下未だ官府数百金を懸けて公等を購ふを聽かざるか。予動かず從容として曰く、船中の人に向って予の日本人たるを告げざるを可とするかと。（此言蔡の腹中を量り其の向背をトするが為に發せり）彼曰く、勿論なり、一旦君が東人たるを知らば、恐らくは我又君を見るの期なからん。予此の言を聞き彼が意中の存する所を知り、然らば言論に隨ひ敢て他人に告げざるべし、足下亦た願くば秘して發する勿れと。蔡曰く、諾。予是に於て前門の虎を防ぎ得たるを知るも、或は其の心中変せんことを疑ひ無き能はず、且つ後門尚狼あり、頭上尚豺彪あり。一たび触るれば直ちに彼の囁む所とならんとす。此間の危機實に間髪を容れず。船上の吏員（此は特に予を捕へんが為に上海官府より派し置きたる者）來り、予の郷貫姓名職業及往く所を問ふ。予曰く、湖北蔡店人、姓は鄭、煙台の和記洋行に傭役し、今將に帰郷せんとす。彼又詰らずして去る。偶々予の背後に臥して鴉片を吸ふの客あり。是亦た湖北蔡店付近の人なり。若し此の客にして予と談話を交へば或は此時破綻せしやも知れず。三時開船。

八月卅日 半晴、夜雨。余是日或は五人の者の看破する所と為らんを恐れ頗る警戒せり。而して天幸遂に余の面を見ず。

八月卅一日 晴。午前十時半船吳淞口に進む。碇泊の支那軍艦より合図を為し進行を止む。予窃に何の為なるを疑ふ。少くして船中上下喧伝す、營官來りて日本人を捕ふと。予直に甲板に上り状を覗ふ。雇洋人二名支那官吏三名端艇より船に上る。予中心既に決す。終に免れざるを知る。退避遂巡せば益々彼の疑ふ所と為らんを恐れ、進んで官吏の前に至り傍より其の問ふ所を聞く。支那官船主に向て問て曰く、日本人宗方此船に在らざる乎と。船主曰く、否、日本人なし。清官曰く、或は服装を易へ弁別し能はざるやも知る可からず、彼色白く、眼大なりと。洋人亦た問ふ所あり（予洋語を解せざれども、予の姓を日本讀にて「ムナカタ」と二度云ひたるを聽けり）、船中の客互に相目す。予故らに

傍に呆立し扇を揺しつゝ其の問答を聞けり。船主日本人無きを以て答ふ。彼等船中を通觀して去る。船即ち輪を鼓す。彼等若し船客に就き一々尋問し其の行李を点査するに至らば、予万々生けるの道なし。且つ此に至らば蔡と雖も前諾を食んで、予の日本人たるを訴ふるに至るは明かなり。予が此の行芝罘を出づるの時厄を免れ、船中にて万々免れ可からざるの境遇に至りて終に免かれ、呉淞にて最後の厄亦脱出するを得たり。四厄を経て捕はれず、五人の知人二日同室に在て予の顔面を看破せず。實に天祐有る者に似たり。嗚呼、天我を棄てず。我豈身を棄つべけんや。彼が予を捕へんとする、上海に於てせず呉淞に於てする者は外國居留地にあらざればなり。若し居留地に於てせば米國領事の手を経ずんば捕ふる能はず。彼の意を用ふる深く予を購ふの切なるを知るなり。我友石川伍一天津に捕はれ已に径に市曹に斬らる。藤島生亦た寧波に捕はれ拷問百出終に誣服して斬る。独り大亮支那官府の意を必獲に用ふる最も嚴なり。而して一顆の首級前後八厄を経來りて全然恙なし。区々たる二、三百金の安価、天豈に哲人の頭をして兎手の及に付き去るを許さんや、一噱。彼等が予の姓を知りしは全く芝罘より發せし十二、十四両号の秘密信官府の手に落ちたればなり。十二時怡和碼頭に着す。直ちに上岸田鍋氏に投す。夜伊東久五郎氏來訪、予の恙無きを見手を打って喜んで曰く、天何ぞ君を護するの厚き、所謂萬死中一生を得たる者即ち是なり。田鍋氏より家大人及び妹、熊本井手、片山、山田守一諸氏の信受取る。是日より直に日本服にむ。前田、松田、成田、景山四人満洲に向て出發せりと云ふ。

九月一日 晴。午前根津、津川両大尉來訪、軍情偵察の方法に付き共に照量する所あり。予の部下なる清人高姓を上海に招致し云々することに決す。伊東、根津等と人の指目を避くる為書東往復六、七回に及ぶ。一昨三十日我軍旅順を占め四千の兵を上陸せしめたりとの報あり。又た山東北部に内乱蜂起、勢猖獗を極め官軍大敗せりとの報山東内地の宣教師より上海に達したり。此の日海軍々令部々長より通牒あり、予を以て海軍書記とせし辞令を發したりと、此れ他に事情有ればなり。清国が英、伊、独、白等の国に向ひ汽船、軍艦等戦争の必要品を百方手を尽して買ひ入れんとしつゝあり。また非職海軍士官等の乗組員を雇入れに手を廻し居れり。英國或る大陸の一港に一艦隊を集中し非職海軍士官を乗組ましめ道を枉げて清に來り援助せんとするの計画ありとの説あり。此の説或ひは真ならん乎。北京神機營十營は愈々出發せり。

九月二日 晴天。根津氏來訪、夜根君より鰻を送り来る。呉大徵湘勇四營を率ひ朝鮮に向ふことに決せり。神機營十營は李氏の奏により俄に出軍を停止せり。劉錦棠逝く。衛汝貴新募する所の勇五營は山東より既に天津に着す。李氏の命に因り新城に駐し盛字新軍と号す。八月二十二日李の命にて天津を發し水路朝鮮の義州に赴き、以て接応に資す。賈起勝募る所の淮勇八營山海關内湯河に駐す。清政府軍餉を助くる為め王公以下文武大小官員の歳支俸を以て三割を扣除し、八旗綠步各營兵丁の月支常餉も三割を減扣し、各省の塩税も倍を以て徵収し、各省の養廉銀も三割を減じ、各戸部に送りて軍餉を助けしむと云ふ。湘勇、桂勇四十營を募集するとの説あり。既に手を分て招募に従事せり。客月廿七日江南製造局示を出し日本奸細を購ふ。一人を獲たる者百両、住所を報知し因りて拿獲せし者は五十両、艦一隻を得たる者は一万両、上首を斬りたる者は五十両云々、頗る好買売也。

九月三日 晴。朝根津氏来る。是日より使いを煙台にやる。高を迎ふるが為なり。本地道台黃祖終罷められ、製造局總弁劉氏其の後を承く（一昨日）。是日家大人及山田珠一に致書即ち予近状を報ず。是日より上海居留の邦人は支那の法律に支配せらるゝこととなり、危険愈々迫る、米國領事署拘留中の楠内、福原も本日五時大東門外にて道台の手に引渡せり。

九月四日 雨。頭痛。呉大徵客月卅一日の夜漢口を發し、鎮江に下り該地駐防の湖南兵四營を率ひ運河より北上、袁世凱四營の兵と百人の騎兵を帶び朝鮮出發せりとの風説。夜は伊東久五郎來談。

九月五日 晴。柳原氏に托し正金銀行より三百五十円の為替を為す。福原、楠内二名本日斬に処せられたりとの説あり。形勢愈々迫危險言状すべからず。予の寓に一丈那人あり、若し予が此の所に潜み居

る事を密告せば、五十両を得るなり。予の形骸六尺支那人の舌頭に任する。茲に両回実に深淵薄氷を踏むより危し。予六日以来既に性命を得て彼の蒼に付す。一腔の寸誠天地に徹するを得ば、此の厄を脱せん。今の時実に予の死期に非ずと雖も、一死を決して天の命を待つ。亦寔に此の時に在り。存亡の決此三日内に在り、志士自奮せずして可ならんや。

九月六日 陰。昨日成田牛庄より帰り来る。予愈明日を以て帰程に上らんとす。一書を作り根津、津川に致し告別す。外に伊東に一封を送る。日本軍旅順の西北四十哩の地に在る一島十英里四方の者を占領し、必要なる建築に従事しつゝありとの説西字新聞に見ゆ。九月一日天津よりの報に、旅順の西北十英里の鳩島に上陸せり。汽船エルドラド入港益此報を慥め且つ旅順を占領せられたりと吹聴せり。先般南蒙自付近孟子開の仏國稅務司虐殺を受け、又た朝鮮にて支那人の扇動により宣教師殺されたることに付き、嚴重なる談判に取掛り居れり、魯國は全力を挙げて仏國を助くる決心なり。又魯は清国が日本に対して勝つと敗るゝとを問はず、今後朝鮮を以て属國の待遇を為さしめざることを断言せり。清国は仏魯の気焰に畏れ有司は多く休戦を希望しつゝあり。

九月七日 晴。高児の信煙台より到る。穆は天津へ逃げ帰りしと云ふ。夜藤城亀彦来る。明日同船にて帰国する者なり。丁汝昌革職留任にされしとの説あり。夜八時荷物を磯長氏に運び洋装に変じ、柳原と出て磯長の寓に至り黒井等と談じ、十時黒井と出て英船アンゼース号に投ず。上等室を占む。長崎に到る二十円。

九月八日 晴。午前五時拔錨未至呉淞膠浅錨泊十時間。下午四時半に至り始て拔錨す。呉淞を過ぐる時或は官府の物色する所とならんを恐れ頗る警戒せり。幸にして事無し。此の行邦人の帰国する者百五十余人、高道武雄等同行たり。

九月九日 雨意。日本の各新聞に予が虐殺せられたるを登載せりと云ふ。

九月十一日 強風洗濤激しく、或は長崎に入港する能はざるを以て口の津に至らんとす。議中変、終に長崎に入る。十時港内に達す。高道諸氏と土佐屋に投す。田鍋氏先ず在り。黒井大尉亦來訪。徳丸、岡、藤崎、成田、大熊諸氏前後來訪。晡時徳丸、田鍋と旗亭に上り飲む、徳丸と警部長を訪ひ途中の証明を得、談話時を移して帰る。夜藤崎等來談。黒井、根津、津川等仏船にて神戸に向ふ。軍令部より電報あり、至急広島大本營に赴くべきを命ず。安着の電報を家大人と山田珠一に発し、佐々友房に致書報之。

九月十二日 晴。鎮西日報社佐々澄治氏來訪。門司山田珠一より電報到る。直に返電明日相会するを約す。是日柳原又熊、藤城亀彦帰県、五元を送りて餞と為す。柳原氏に荷物一個を托送す。成田鍊之介鹿児島に帰る、來て別を告ぐ。之に沙掛一領を贈て餞と為す。午後四時門司石田屋より井手三郎、鳥居赫雄連名の電報來り、さっそく彼地に来らんことを望む。既に山田に明日会合を約せしを以て返電せず。晚鎮西日報社の佐々木澄治、岡次郎、松田明辰三氏の招きを以て満月亭に至り飲む。九時帰る。大熊、藤崎在り、藤生留宿。

九月十六日 午前六時宇品着、直に上陸井手、栗林と腕車広島市に入る。相距る五十町、田鍋、中島真雄を訪問せり。八時天神町中島久吉の家に投す。午前出でて大手町長沼に到り、黒井海軍大尉を訪ふ。小談去って根津、津川両大尉を柳町藤川に敲き中餐して帰る。栗村鮮行の事を委嘱す。直に採用せらる。下午四時黒井海軍大尉來り、破格を以て特に謁見を賜ふの内命を伝ふ。拝謁の時は清国滯在中の支那服を着すべしとの事に付、直に電報を熊本緒方、山田に発し清服を送来せしむ。六時長沼旅館に移る。夜小沢大尉と飲む。是夜朝鮮より電報あり、本日未明平壤の敵軍を掃討敵將左宝貴以下捕獲頗る多し云々。

九月廿日 晴。佐々友房、井上海軍少佐に發信す。山田珠一電報到り、海軍大勝利の真否を問ふ。鐘崎三郎來訪、昨夜來着せりと云ふ。是日より大手町中野宅に移寓す。井手三郎京都に赴く。夜小沢徳平氏を長沼に訪ひ飲む。庭前にて海軍音楽隊の奏楽あり。平壤及び黃海々軍の大勝を祝する者、快楽道

ふべからず。徳富猪一郎、佐々友房氏の電報及書状到る。夜機密費の皮算を終る。本月十七日朝我艦隊十二隻盛京省大孤山沖に至り、敵の艦隊鎮定、経來、平遠以下、揚威、超勇、致遠、靖遠等の十四隻と水雷艇六隻に出会い、午後〇時四十五分より五時過ぎ迄數回激戦、敵船來遠、揚威、超勇三隻を擊沈し、致遠又は靖遠の中一隻を沈め、定遠、経遠にも火災起り威海の方向に走るを見たり。我艦隊赤城艦長以下死傷甚だし。比叡、赤城、松島最も苦戦す。

九月廿九日 陰天。朝三沢、別府、藤崎、成田、大川、中川、大隈、大木、中原、其他諸氏來訪。下午より盛京南海岸の調査に従事す。大連湾付近の大窓口を取り進んで大和尚山石門村を攻略し、金州を占めて旅順の後路を絶つの策を献ず。夜荒賀、澤村繁太郎來談。

十月初四日 晴天。朝佐野來訪。午前九時上車大本營に至る。十時有栖川親王殿下に謁す。御苦勞との御辭あり。十一時半角田海軍大佐の嚮導にて大本營御館の前庭に於て、清國滯在中の服装にて（支那服装なり）天皇陛下に拝謁す。角田大佐姓名を具して略歴を上奏す。陛下一々頷し玉ふ。龍顏殊に麗はしく在はせし様拝し奉れり。区々たる微功恐多くも叡聞に達し草莽一介の躬を將て、軍事恍惚の際に係らず万乗の尊を拝謁するの光栄を荷ふ、寔に感泣の至に堪へず。微臣満腔の感激筆舌の尽す能はざる者あり。野田野戦監督長官に面す。下午一時帰る。本營又た使者を遣り出頭を命ず。直に抵る。官房に於て宮内大臣土方久之、侍従長徳大寺侯、米田侍従、岡澤少将の諸公に見ゆ。清國の形勢に就て下問さる。予一々屢々陳二時間の久しきに及んで帰る。後に聞く、陛下の勅命により此の御下問ありしことを。榮誉之至感激不尽。鳥屋町明月亭に至り中西正樹を訪ぶ。本日朝鮮より帰りし者、牙山、平壤の戦場を歴來りし者なり。五時中西、沢村、赤津三人と船亭に飲む。佐々友房氏大阪よりの電報、斎藤員安、矢島等の信到る。夜安原海軍少佐を訪ひ、去て中島真雄を天神町に訪ひ、十時去て中西、山崎両氏に栗林の処に会し、十一時帰る。東京斎藤並びに家大人及び弟亀雄に致書し、亀の教導団退学の大に不可なるを戒め軍國の為に一身を献ずべきを教訓す。佐々友房氏に打電、本日謁見を玉はりしを告ぐ。朝鮮仁川兵站部黒井大尉に致書す。

十月八日 晴天。六時上車出でて海軍大將西郷氏を洗心樓（広島）に敲く。清國の現勢に付詰問さる。開襟快談三時半の久しきに及ぶ。山本権兵衛（大佐）、伊集院少佐、伊藤少佐、斎藤秘書官等來会。樺山軍令部長は所用ありて来らさりし。晚餐を饗せらる。九時半辞帰す。西郷氏容貌雄偉、語辭丁寧、礼待自然に出で修飾する所なし。坐口に老西郷の風采目前に見るの感あり。奥村金太郎東京よりの信至る。従軍の希望にて余の周旋を乞ふ。奥村及熊本柳原又熊に復書し其請を全からしむべきを報ず。

十月九日 晴天。西蓮寺に至り沢本生を訪ひ写本を托し、朝食後上車鶴水館に至り佐々友房氏を訪ぶ。山田珠一、柳原、佐野等在焉。中食し対清の方略を談じ、佐野、山田と出て田鍋安之助を二乗山の草庵に訪ぶ。別府、藤崎等來会。晩食後田鍋等と出でて天神町に至り、中島真雄を訪ぶ、在らず、途中之に逢ふ。相伴ふて同氏の寓に至る。佐野来り、佐々、安場両氏と樺山中將に会することを告ぐ。直に出でて長沼旅館に至り樺山氏を見る。佐々、安場、河野主一郎、九鬼隆一諸氏在焉。中將清國の形勢を問はる。談話時を移して帰る。樺翁容貌魁梧重厚にして氣焰人を圧す。当世稀に見るの偉丈夫なり。山崎羔三郎、伊藤良三、河野熊吉、熊谷直亮、荒賀直順前後來訪。伊地知季綱に復書し通訳官に周旋せしことを報ず。

十月十日 晴天。午前熊本井手、緒方に致書、広島に來り従軍の事を商量せんことを勧む。朝中島真雄を訪ひ十時帰る。天津拘禁中の石川伍一九月二十日天津城西門外に於てはりつけの刑に処せられし報あり。軍械局劉姓も同時斬首せられたりと云ふ。痛恨惋惜に堪えざるなり。研究所生徒楠内友次郎、福原林平又上海より南京に檻送せられ、客月廿四日斬に処せられたりと云ふ。嗟々痛ましい哉。独り寧波の藤嶋何の状たるを知らず。

十月十六日 陰天。午前六時上車明月亭に至り、猪田正吉、藤崎秀、大熊鵬、藤城亀彦、高橋謙、山内

嵐、佐野直喜、山崎羔三郎、荒賀直順、熊谷直亮、北御門松二郎以下数十人の遠征を送り宇品港に到る。第一師団此日を以て上船、部伍整然大に見るべし。大山大将、山路師団長之を率ひて發す。根津大尉、津川大尉、梶川大尉等に決別し、通訳諸氏に別れ、田鍋、小濱と共に上車広島に帰る。

十月廿一日 日報に、本月八日楠内友次郎、福原林平二氏南京にて斬らる、可痛也とある。

十月廿七日 晴天。朝井手三郎、緒方二三熊本より來着。八時西蓮寺に至り従軍者諸氏と撮影す。井手の処に至り談ず。十二時井手、緒方、松渚氏と山文船室に会食す。井手の寓に至り、十一時帰る。是日朝九連城の敵を払い全勝を得たり。前日水口鎮より梨子園に渡り靈河を渡り九連城の左側面に出でし者と義州より正面攻撃をなせし者と合撃せしなり。又第二軍も盛京省の南海岸化雲付近の地に上陸せりとの電報あり。化雲金州に至る十二里、碧流河口坎子底下に上陸せりとも云ふ。

十一月十六日 晴。朝中西来る。共に出て吉田清揚を訪ひ別を告ぐ。本日より第一軍に赴けばなり。西蓮寺に至り熊本生十四人と撮影す。十一時同県人右田亀雄、井口忠次郎二生の第一軍に赴くを送る。

十二時白岩の処に至り飲む。二時前田、松田を訪ぶ。晩食後前田と中西、中島等を寺町に訪ぶ。田鍋等在り。十時帰る。熊本古庄弘、徳丸策三の信到る。

十一月廿三日 大本營に出勤す。四時帰る。寺裏に至り会飲す。尾本寿太郎、井手、片山、前田、松田、緒方、松倉、藤森、平山、牧、深水十八及び予なり。十一時帰る。家大人及び長崎鈴木行雄の信到る。

十二月十四日 陰。午前徳丸策三、石原市太郎來談。山田珠一の信到る。夜明月亭に至る。井手、緒方等帰来。十一時帰る。是日在旅順口第二軍付佐野直記より海軍章程二冊及煙台道台劉含芳より旅順兵備道龔照璵に宛てたる信書を送り来る。皆旅順陥落の時該地道台衙門に於て分捕せし者なり。劉の書信は、予が清国に潜伏し軍情を偵察し居ることを載せ、南洋大臣劉坤一よりの命により予を捕縛すべきことを照会し、旅順道台に注意せし者にて、予が本年八月芝罘より旅順、威海の軍事報告書の訳文をも添えたり（此の報告は第十二号にて、上海道台の手に落ちたものなり）。其翻訳の巧妙にして精細なる毫も予の意を失はず、頗る満足せり。此書計らず敵中に落ちて予の手に落つ、眞に奇中の奇なる者なり。